

説 教

新年礼拝

2022年1月2日

黒田 禎一郎

主 題：「信仰の人アブラハム」

—アドナイ・イルエー

テキスト：創世記 22 章 9－14 節

はじめに

- ・新年あけまして、おめでとうございます。本年も皆様の上に、神の祝福がありますようお祈りします。私たちは本日、ここに新年礼拝を迎えることができ感謝します。
- ・一年のはじめに、どんなメッセージを皆様にお届けしようかと祈り思案している中で、主様は「アブラハムの信仰」から学ぶよう導いてくださいました。そこで、私は信仰の父と呼ばれる父祖アブラハムが、どんな信仰をもっていたかを学びたいと思います。
- ・アブラハムは、その信仰生活において4つの大きな「決断の時」に出会いました。

① 創世記 12 章

カランを旅立つ時です。カランはメソポタミヤの北西部、ユーフラテスの東側流域に位置しています。彼はそこに75年以上住み着いた後に、大きな幻を受けました。

12:1 その後、主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。創世記

- ・彼は神の言葉を信じ、長旅に出発しました。この時、彼は75歳、彼の信仰のアドベンチャー・ワールドの始まりでした。

② 創世記 15 章

結婚して約60年間、彼には不妊の女性サラとの生活で、子どもが与えられませんでした。ほとんど諦めようとしていた時、神はこのように語りかけられた。

15:5 「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこうになる。」 創世記

- ・彼は不可能の現実の中で、神から約束を受けました。

③ 創世記 17 章

- ・神との契約の民として「割礼」を受ける時です。

17:10 次のことが、わたしとあなたがたと、またあなたの後のあなたの子孫との間で、あなたがたが守るべきわたしの契約である。あな

たがたの中のすべての男子は割礼を受けなさい。 創世記

④ 創世記22章

- ・一人子イサクを神に捧げ物として、火が燃える祭壇に捧げようとする場面である。

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」 創世記

- ・この4つは信仰の父と呼ばれるアブラハムが、決断した重要なステージです。私たちは2022年を迎えました。人生の決断を求められることがあるかも知れません。アブラハムは、その大切な決断をどのように行ったのでしょうか？ 2点

大切なポイント

1. 信仰生活の矛盾

1) アブラハムにとってのイサク

- ・すでにご存じのように、アブラハムには神が約束された子イサクが誕生する前に、女奴隷ハガルとの間にイシマエルが生まれていました。妻サラとハガルの間の壮絶な嫉妬心からむドラマを経て、ハガルとイシマエルはアブラハムから離れて行きました。アブラハムにとってイシマエルは自分の子です。彼の心中には、どれほど大きな痛みがあったことでしょうか。
- ・アブラハムに残されたのは、その次に生まれた約束の子イサクだけでした。この子は神がくださった子、しかも不妊の妻サラから生まれた子でした。きっとアブラハムの心は、ひたむきにイサクに向かっていったでしょう。彼は神と交わってはいたでしょうが、いつの間にかイサクに対する親の愛情、肉の情というものが、彼の心を捕らえていったと思います。これは当然考えられますね。
- ・はじめは、神からいただいた約束の子だということでした。しかしやはり自分の子だという思いがわいてきたでしょう。この可愛い子は、神からの授かり者と分かっている、いつしか彼は自分のものとして心捕らえられるようになっていったと思われます。これは肉の情の強さ、また恐ろしさでもあります。
- ・私たちも気をつけねばなりません。アブラハムはただ神の一方的な恵みだけで、イサクを受けたはずで、自分の働きや力ではなく、まったくの恵みでいただいたイサクでした。しかし、そこに信仰の大問題があります。当座は神の恵みとして、「すばらしい！ 神様、感謝します！」と言うのですが、いつの間にか、神より恵みの事実には捕らえられてしまうのです。さらに、それ

を自分のものとしてし、そこに留まろうとするのです。

- ・すばらしいのは神です。そのような恵みを与えてくださる神です。私たちは賜った恵みが大きければ大きいほど、いよいよ主をほめたたえ、主を喜び、主に仕え、主を求めていくのでなければなりません。

- ・皆さん。「**信仰の矛盾**」とは、そのような人間的な情、肉の情、そこに神の試みを受けなければならない理由があることです。アブラハムの場合もそうでした。彼は信仰が問われることとなりました。もしイサクを祭壇に捧げることになれば、神が約束されたことばは、どうなるのでしょうか。神はこう言われました。

「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」

創世記 15:5

ですから、信仰そのものが問われます。

- ・可愛いイサクを祭壇に捧げ、殺しなさいと言われ、アブラハムは「**信仰の矛盾**」を感じたでしょう。信仰がなければ、何もないことは分かります。しかし、信仰も自分の信仰になりかねません。自分の信仰に執着し、自分の信仰の立場を主張するようにもなります。そこに、アブラハムが試みられなければならなかった事実がありました。

2) 信仰の試みに面して

- ・もうひとつ、ここで「**信仰の矛盾**」を考えることがあります。それはアブラハムにそれまで与えられた信仰の試みは、その結果というものが示されていたことです。そこまでも信じていけば、この約束が成就するという結果が示されていました。しかし、今回は違います。

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」
創世記

- ・皆さん。普通考えて、アブラハムの心の中には、きっと「神様、それは無理ではありませんか。イサクは、あなたが約束してくださった子ではありませんか。それを信じていただいた子ではありませんか。」、という思いがあったでしょう。
- ・ここに信仰の大問題があります。神は先が見えない道を示されました。これは「**信仰の矛盾**」ではありませんか。つまり、神がアブラハムに教えようと

された点は、「真の信仰とは、どこまでも「ハイ」と言って従い、前進することです。」ということです。 真の信仰は、たとえ先が見えなくても神が言われたおことばを、信頼し進むことです。ここがはっきりした時、私たちの信仰がいよいよ本物となっていきます。アブラハムは、主のことばに従順でした。

3) 三日の道のり

22:4 三日目に、アブラハムが目を上げると、その場所がはるかかなたに見えた。

- その時、アブラハムはベエルシェバにいましたから、エルサレムのモリヤの山までの距離は、約 62km です。丁度、三日間かかる距離です。神はなぜ、わざわざ三日間かかる所に行けと、言われたのでしょうか。それはこの三日を要する道のりが、アブラハムが信仰を試みられるのに必要な道程であったからです。
- 皆さん。イサクを連れて歩く三日間、その一日一日、一刻一刻がアブラハムにとって、試みの一日でした。身近であれば決心した時に、さっとやってしまえば事は終わります。けれども三日間の道のりは、深刻な試みの意味がありました。人は本当に決心したことでも、時がたつと心がくじけていくからです。
- 信仰とは、そんな瞬間的な、感激的な感情的な出来事ではありません。三日間、一步一步、歩いて、そして変わらないものです。心のすべてを注ぐ全存在的な出来事です。イサクを神に捧げることは、自分の身を捧げることよりも辛いことであつたでしょう。
- 私には、モリヤの山への三日間の歩みは、イエスの十字架への一步一步を思わせます。ご自分がかかる十字架を背負とは、どんなに重いものであつたでしょうか。神への信頼がなければ、一步もその足を前に進めることはできなかったでしょう。
- ここで、アブラハムと神との関係は目に見えることより、より以上に具体的に強いものでななかったら、アブラハムの信仰はくじけてしまったでしょう。彼にとって、見えることより見えない神との関係が強くありました。
- イエス・キリストも十字架を負い、カルバリの丘へと進む3年間でした。イエスは自分を十字架につけるために、ご自身が燔祭の羊として、神に捧げるために歩まれました。天の父へのまったき信頼（信仰）がなければ、決して進めない道のりでした。

＊ このようにモリヤの山に向かったアブラハムの人生は、試練でした。そして「信仰の矛盾」を覚えるものでした。しかし神のストーリーは、ここで終わっていません。いいえ、ここから始まるのです。それが次の

ポイントです。

2. 主の山の上に備えがある

1) アブラハムの信仰

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

- ・アブラハムは、神が言われたとおりに従順でした。そして、み言葉は次のように語っています。

22:5 それでアブラハムは若い者たちに、「あなたがたは、ろばといっしょにここに残っていないさい。私と子どもとはあそこに行き、礼拝をして、あなたがたのところに戻って来る。」と言った。

- ・アブラハムが若者たちを連れていかなかったのは、たぶん彼らによって、いざという時に妨害されないためであったからでしょう。神から言われたことを妨げなく、その通りに遂行しようとするアブラハムの忠実な心とその姿勢を見ることができます。

22:6 アブラハムは全焼のいけにえのためのたきぎを取り、それをその子イサクに負わせ、火と刀とを自分の手に取り、ふたりはいっしょに進んで行った。

- ・「全焼のいけにえのためのたきぎ」をイサクに背負わせ、自分は「火と刀とを手に取り」、モリヤの山に登って行きました。
- ・皆さん。このイサクは、自分が殺され、そして焼かれ、神へのささげものとなるたきぎを背負って歩く姿です。考えてみてください。なんと残酷な姿ではありませんか。自分がかかる十字架を背負い、ゴルゴタの丘へ向かったイエスの姿に通じるものがありますね。イサクはアブラハムのかけがえのないひとり子、自分の命のように大切なひとり子です。アブラハムの心はどんなであったでしょうか。

22:7 イサクは父アブラハムに話しかけて言った。「お父さん。」すると彼は、「何だ。イサク。」と答えた。イサクは尋ねた。「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」

- ・皆さん。このイサクの問いに、父アブラハムは一瞬その心臓をぐさりと、えぐられたような思いをしたことでしょう。それは、素直なおだやかな問いでしたが、アブラハムにとっては真に辛い、聞くに耐えない問いでした。アブラハムの答えは次です。

22:8 アブラハムは答えた。「イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。」こうしてふたりはいっしょに歩き続けた。

- ・イサクの問いに対し、アブラハムは「それはお前だ！」とは、さすが言えませんでした。すべてのことは神の御手に委ねられている、というのがアブラハムの答えでした。そうでなければ、家を出てくることもできなかったでしょう。モリヤの山に向かうことも出来なかったでしょう。彼にとってモリヤの山に到着するまでの三日間、それはさらに神に委ね、明け渡し、神に従いきるということがはっきりした時間であったでしょう。
- ・彼の決心が、もしいいかげんのものであったならば、たじろいでしまい消えてしまったでしょう。信仰というものが、もし一時的なものであるならば、時の経過によって試みられるものです。ほんとうのものは、時が経つにつれ確かにされていくものです。

「イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。」は、アブラハムの信仰を表わしています。それは、神にゆだねきったアブラハムの姿です。

22:9 ふたりは神がアブラハムに告げられた場所に着き、アブラハムはその所に祭壇を築いた。そうしてたきぎを並べ、自分の子イサクを縛り、祭壇の上のたきぎの上に置いた。

- ・神の示された場所モリヤの山に来た時、そこはアブラハムの信仰が高嶺に至る場所でした。カルデヤのウルから、この場所に導かれたのは、まさに信仰の全きを見るためでした。そこまでのアブラハムの生涯は、じつにいろんなことがあったと思います。
- ・皆さん。私たちも人生において、いろんな経験をさせていただくものです。悲しい経験もあります、苦しい経験もあります、あるいは素晴らしい喜ばしい経験もあります。しかし、その一つ一つを通して、私たちの信仰は完成へと導かれていくのです。

- ・ところで、この時イサクはどうであったでしょうか。何も書かれていません。ただこの文脈で言えることは、父アブラハムがするままだに任せている姿です。ほんとうに父を愛し、信頼しきって、自分をあけ渡しているイサクの姿です。私には父なる神を信頼し、明け渡しておられたイエスの姿と重なるのです。この時のアブラハムの心境は、この約束の子を殺してしまったら、いったいどうなるかです。星の数のように子孫を与えられた約束は、どうなるのだろうか？というつぶやきは、もうなかったと思います。それらは、人間の可能性にたつての常識であるからです。この時のアブラハムは、もう無条件の信頼、無条件の従順に至っていたでしょう。ヘブル11：17—19は語ります。

11:17 信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。
彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。

11:18 神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」と言われたのですが、

11:19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。

- ・アブラハムは、自分が信じる神は全能の神であると信じていました。
イサクをすでに信じきっていました。 創世記

17:1 アブラムが九十九歳になったとき主はアブラムに現われ、こう仰せられた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ。

- ・全能の神（エル・シャダイ）は、無から有を生み出す絶対なる方です。ですから、神が「あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ。」と言われたように、アブラハムは全能の神を、そのまま信じ、信仰をもって御前に歩むようになったのです。

2) 神はアブラハムに何を求めたか？

22:10 アブラハムは手を伸ばし、刀を取って自分の子をほふろうとした。

22:11 そのとき、主の使いが天から彼を呼び、「アブラハム。アブラハム。」と仰せられた。彼は答えた。「はい。ここにおります。」

- ・アブラハムが刀をとってイサクを殺そうとした時、彼はすでにイサクを神に捧げていました。その時、主の使いがアブラハムに呼びかけました。

神が真に求めておられたのは、イサクの体ではありませんでした。アブラハムの心です、アブラハムの信仰です。 神は決して、ささげものを求められる方ではありません。詩篇

51:16 たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。
全焼のいけにえを、望まれません。

51:17 神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

- ・神はアブラハムのその心が分かった時、その行為を止められました。

2:12 御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」

22:13 アブラハムが目を上げて見ると、見よ、角をやぶにひっかけている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行って、その雄羊を取り、それを自分の子の代わりに、全焼のいけにえとしてささげた。

- ここに私たちは、神の前に生きる人の姿を見ます。主は言われました。

創世記

「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ。」
 私たちにとって最も重要なことは、全能の神の前に歩み、全き者であることです。神はそのような人を、求めておられます。

3) 「アドナイ・イルエ」 (主の山の上に備えがある)

22:14 そうしてアブラハムは、その場所を、アドナイ・イルエと名づけた。今日でも、「主の山の上には備えがある。」と言い伝えられている。

- この言葉は、私たちに勇気を与えてくれます。力強い言葉です。必ず主は、そこで必要なものを備えてくださいます。主は、アブラハムに全焼のいけにえの羊を備えておられました。
- 私たちの歩みにおいても、必要なものは神が備えてくださいます。
 私たちは過去において、事柄は小さくても、幾度も「アドナイ・イルエ」を経験したのではないのでしょうか。あの時、あの所で、主は私に備えてくださっていました。もし備えてくださらなかったならば、どうなっていたのでしょうか。
- 皆さん。これから先もそうです。神はおことばを守られるお方です。必ず「アドナイ・イルエ」をもって導いてくださいます。どのように行きづまっても、必ず逃れる道を備えていてくださいます。どのような試みがあっても、神は必ずその中に逃れる道を備えていてくださいます。 1 コリント人への手紙

10:13 あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

- 主を信じ、従っていく者にとっては、その行くところどこでも、「アドナイ・イルエ」として歩くことができるのです。どこでも、主は必ず必要を備えてくださるからです。そのような主のお取り扱いなしに、私たちの信仰は前進することはありません。

ま と め

主 題：「信仰の人アブラハム」

—アドナイ・イルエ—

- ・私たちは、2022年を迎えました。信仰の父アブラハムの生涯で、もっとも重要な決断をしたストーリーから学びました。私たちも今年、「信仰の決断」をしなければならないことがあるかも知れません。アブラハムが結論として、語った言葉を今日のまとめとしたいと思います。

22:14 そうしてアブラハムは、その場所を、アドナイ・イルエと名づけた。

今日でも、「主の山の上には備えがある。」と言い伝えられている。

- ・私たちも主を見上げ、主を信頼し、主とともに歩む時、「アドナイ・イルエ」という生活を過ごすことができます。私たちの主である神は、「備えの主」です。行きづまりや試練があっても、必ず逃れの道を備えておられますから感謝します。新年にあたり、私たちはそのような信仰を持って、この新年を歩み始めようではありませんか。

* God bless you!